

子どものこだわりと保育

大橋 利恵子

(女子聖學院短大非常勤講師)

道家が存在していたのはだかろうが、どういふべきである。  
『平家物語』には数多くの話が含まれているが、出来るところから一つずつその背景を明らかにし、あわせて物語全体の背景を知りたいことだわりつつ、三十余年が過ぎてしまつた。まだまだ道は遠く、残された時間は少なくなつていくが、これからも『平家物語』成立の解明に力を傾けたい。

いての話と九条道家による祈念・鎮魂とを直接むすびつける資料は今のところ何も見つかっていないが、私は何らかの関わりがあるのでないかと推測している。さらに付け加えると、物語文学の最高峰といわれる『源氏物語』の背後に摂関流の藤原道長が存在しているように、『平家物語』がほぼ今の姿になつた背後には、同じく摂関流につながる九条

けい君は三歳児、入園式の日はお母さんと一緒にたので何事もなく過ごされました。し

## 特集〈こだわる〉 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

かし一日目の朝、けい君はお母さんから離れようとしません。三歳の最初は無理に離そうとせず、お母さんにゆっくりつきあってもらい、だんだんに園生活に慣れてから、お母さんとバイバイできるようにしています。

けい君もどうやらお母さんとバイバイとできるようにはなったのですが、廊下から上目使いで担任の先生の顔をじっとにらんで動きません。

「けい君、おはよう、出席ノートにシールを貼つて遊びに行こう」と担任が誘うと、ゆっくり近付いてきます。

「かばんおろして」と言うと、首を振ります。

「あれ、とるのいやなの。それじゃ、そのまでいいからシールだけ貼ろうか」ということで、とりあえず出席ノートにシールを貼つて園庭に遊びにいきました。砂場に行つて穴を堀り始めたのですが、けい君はかばんを肩にかけたままです。

「けい君、かばんここに置いておこうか」

と声をかけると、けい君は必死な顔をしてかばんを押さえています。その様子を見て、担任はいそいで、

「いいよ、そのままかばん持つていてね」と付け加えました。

それからしばらく、けい君のかばんはおろされることなく、どこで遊ぶ時もけい君の首

にあらさがつっていました。かばんをかけていることにこだわっている、というより、かばんをかけていることで、自分の気持ちの安定をはかつていていました。

その姿を見て、子どもが時々見せる（あれじやなくてはだめ）とか、（こういう順でやらなくてはだめ）ということだわりは、そのことで一番安心できる状態を確保しているのではないか、と感じられました。もしそうだとしたら、教師は教師の考え方で、かばんをかたづけなくては遊びにいけないとか、これはここに置いておかなくてはいけないとが言っていたら、子どもの気持ちとかけ離れてしまっているということになります。子どもがこだわっている事柄の善し悪しを考えるより、こだわっている気持ちになつてあげられる保育をしたいなと思います。

さて、けい君のかばんはどうなつたかといいますと、しばらくたつとかばんが邪魔になつてきただようで、遊んでいるところの隣に置かれるようになりました。さらに六月ごろになると、かばんはロッカーに納まるようになつたのです。しかし、さらにはけい君の真のこだわりが発見されました。ある日、砂場で遊んで汚れたので、シャツを着替えさせようとしているとどうしても脱いでくれません。今着ているウルトラマンの絵が付いているのでなくてはいやだと言い張ります。けい君がウルトラマンが好きだということは知つてはいたのですが、ここまでとは……と驚くやら感心するやらでした。私達が「こだわっているかばん」と思つていたのは、実は「かばんに付いているウルトラマンの絵」だったのです。

## 特集〈こだわる〉 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

けい君のこだわりがウルトラマンと判明した後は、それを利用して一緒に遊びやすくなつたことは勿論です。子どものこだわりは興味の強さかもしません。その事柄ひとつをめぐつて、いろいろな遊びを考えられるのもすてきです。また、このように一人のこだわりが保育の中でうまく生かされていくことは大切だと思います。

しかし、遊びの中ではどうしてもこだわっているとトラブルの原因になることもあります。たかし君はにこにこしながら、いたずらをしがけてきたり、五歳の子と一緒に遊ぼうかと気軽に声をかけたりできる活発な三歳の男子です。心の中に楽しいイメージをいつぱい持つていて、会話を弾みます。例えば、給食の時（岐阜は幼稚園でも給食です）どこからかはえが飛んできて、食器のまわりをうるさく飛び回ります。

「はえがうるさくていやね」と、私がつぶやくと、

「へんなおじさんはえだね」とたかし君。

「え、へんなおじさんはえ？」と聞き直すと、

「そう、へんなおじさんのはえ」

それ以来、三歳児のクラスでははえを呼ぶ時に「へんなおじさん」とか「いやなおじさん」などの呼び名がついてしまい、（おじさんと呼ばれる方たちには申し訳ないのですが）はえがくると「へんなおじさんが来た」と騒ぐようになつてしましました。

そんなたかし君の大好きな遊びはダム）つこです。五歳児たちがしている時にも、いつ

のまにか仲間になつてせつせと水を流しています。その日は三歳と四歳が一緒に川を作り、穴を掘つて、水道からホースで水をいれ、川から穴へ水を流して遊んでいました。ふとしたきつかけでホースの先に砂がかかり、水の出口があさがれて見えなくなり、しばらくすると砂が流れ、再び水が流れて出てきました。それを見たたかし君は、自分の遊びたいイメージにぴったり合つたようで、すぐそのことが気に入り、何回も何回もホースの先に砂を盛り、その砂がくずれていくことを楽しみました。しばらくは、みんなそれでよかつたのですが、四歳の子がホースの位置を変えて遊びを変えようとした時、たかし君はすごいいいきおいで、「ダメ、ホースはここでなくてはだめ」と、ホースを奪い返しました。誰がどう言おうとホースの位置を変えさせないとし君と「四歳に威張る気か」という氣分の四歳児がけんかになったのは、すぐのことでした。

たかし君のこだわりを通してあげたい、でも遊びの場面ではそうもいかない。自分のこだわりを思い切り出す良い気分や、周囲にそれが受け入れられないくやしさ等の経験が、子どもの育ちに繋がっていると思いながら、たかし君のこだわりを見て いる私でした。

(岐阜市立大洞幼稚園)